

【視察調査報告書】

委 員 会 名	文教経済委員会
委 員 名	【委員】 9 名 石井宏和委員長、古里幸太郎副委員長、高橋剛委員、九鬼ともみ委員、市川克宏委員、小林秀司委員、星野直美委員、吉本孝良委員、中島正寿委員
日 程	令和 8 年（2026 年）5 月 12 日（火）～5 月 14 日（木）
詳 細	
視察日及び視察先	5 月 12 日（火）岡山県倉敷市、13 日（水）児島商工会議所（倉敷市）
視 察 内 容	日本遺産を活用した産業振興・ブランディングについて 地域資源を活かした回遊性向上の取組について 産業と観光を結びつけた集客戦略について
概 要	倉敷市は 3 つの日本遺産を持ち、その中でも「一輪の綿花から始まる倉敷物語～和と洋が織りなす繊維のまち～」は、産業の起源（綿花栽培）から文化形成までを一つの物語として編集し、観光・教育・地域発信に活用している。また、年間約 300 万人が訪れる倉敷美観地区は、伝統的建造物群保存地区として景観保全と商業活性化を両立させている。歴史的景観を守りながらの観光戦略及び商店街・商業施設・文化施設をつなぐ回遊性向上策について学び、所管事務調査の参考とするため、視察を実施した。 児島地区は、国産ジーンズ発祥の地として知られ、国内外から多くのジーンズファンが訪れる産業と観光の地区である。衰退した商店街を地場産業（ジーンズ）を核に再生、国産ジーンズ発祥の地という歴史と産業のストーリーを観光コンテンツ化し全国的ブランドへ育てた“産業 × 観光 × まちづくり”の成功モデルを現地で学び、所管事務調査の参考とするため、視察を実施した。
委員長所感 (意見・課題・本市への反映など)	●石井宏和委員長 「響き合う文化観光都市くらしき」を将来像とする観光ビジョンは、これまでの実績の深い分析と評価をもとに、地域共生型観光や感動体験の創出などを目指すもので、J S T S－D(日本版持続可能な観光ガイドライン)に準拠し、その認証も受けている。J S T S－Dは、住民や旅行者の意見の調査など持続可能なマネジメント、ディーセント・ワークと雇用機会など地域経済への貢献など求める高度なもので、本市もこの認証も目指し、包括的な観光ビジョンを策定すべきだと強く思った。持続可能な観光にするためには、観光客数とその年代のデータなどを広く集めて現状認識を共有する必要があるとあり、倉敷市がそうした情報を公開していることも見習いたい。大原美術館など趣のある建物が並び美観地区は、客引きや夜間の営業など一部規制していることもあり、ライトアップされた川岸など古風で落ち着きがあった。夜間と朝の観光のために、水島コンビナートの工場夜景を含めた夜景マップの作成や、早朝の美観地区の情

	報発信なども進めているとのことで、これにも学びたい。 児島地区では、衰退した商店街を立て直すために、ジーンズストリートを立ち上げ、多くの専門店が集まって、新たなにぎわいを創出している。道路やトイレ、バスや駅舎など大胆で軽快なジーンズのデザインであふれていて、他にはない特別感が強くあり、街歩きも楽しめた。商工会議所も入る児島産業振興センターには、デザイナーを目指す人たちの起業や創業期を支援するデザイナーズインキュベーションが7室あり、格安な賃料で特殊ミシンなど充実した設備を常時利用できる。ここから実際に起業した方がジーンズストリートに店舗も構えているとのことで、本市でもこうした支援も検討すべきだと思った。
委員所感 (意見・課題・本市への反映など)	●古里幸太郎副委員長 3つの日本遺産を抱え、伝統的建造物群保存地区である美観地区など観光名所も豊富な倉敷市の取組に注目をしていた。視察では、観光、日本遺産、商工の3所管から説明や事前質問への回答をいただき、濃厚な学びとなった。本市と倉敷市は、人口規模や伝統産業などの共通項がある中、課題を捉えた上で、観光都市として持続可能なビジョンを明確に持たれていることに感銘を受けた。特に、市内5エリアにおいて、地域別の課題と解決の方向性を明確にしている点は、6圏域ある本市においても、地域の特色を活かした施策展開へのヒントになった。また、文化振興が結果的に地域産業の活性化に結びつくという考え方から、文化・芸術・自然・食など倉敷固有の魅力を産業・観光と一体的に活用するため、文化産業局を新設した点は、所管事務調査テーマの出口戦略の参考になった。一方で、DMOを現在検討している点や、日本遺産そのものの認知度は市民の半分程度にとどまっていること、回遊性の向上と公共交通機関が不十分である点などは共通の課題であり、今後の施策展開のポイントであると感じた。美観地区では、実際にそこで暮らす市民への配慮があり、今後本市で地域振興を推進していく際にも必要な課題点となるであろう。学習まんがの制作や小学3・4年生の副読本に日本遺産認定等を掲載している取組は短期間での実現の可能性を感じ、ソフト戦略として、周知やシビックプライド醸成の入口として考えられる。 児島ジーンズストリートの視察では、シャッター街化していた旧商店街を観光型商店街へと変貌させた取組に衝撃が走った。商工会議所とタッグを組み、一大商業ストリートを作ろうとの一念発起と、一軒一軒回って説得を繰り返す地道な取組が結実し、3店舗から52店舗まで拡大させた熱量が事業成功の根幹でありポイントであることを教えていただいた思いである。旧商店街200店舗中、100店舗まで拡大していく決意を伺い、今後のさらなる発展が楽しみな地域である。 ●高橋剛委員 倉敷市への行政視察を通じ、八王子市の文教経済委員会として大変示唆に富む学びを得た。 特に印象に残ったのは、文化、観光、産業を一つの局に統合した「文化産業局」の組織体制である。

①行政特有の縦割りを排し、歴史的街並みや産業といった多様な資源をパッケージ化して発信する起動性の高さは、本市の経済・観光振興においても大いに参考になる。

②単なる集客や観光客の満足度だけでなく「地域住民の観光受容度 70%以上」を重要指標に掲げ、持続可能な観光地経営を目指す姿勢に感銘を受けた。

③景観保全の制約からハード面での整備が難しい地区に対して、住民やボランティアを育成する「おもてなしマイスター制度」によってソフト面でのバリアフリー化を図る取組は、誰もが楽しめる環境づくりの好例と言える。

④圧巻のジーンズのブランディングは、一発でジーンズの街なんだ、と印象付ける上で効果があると思う。非常に印象に残った。

●九鬼ともみ委員

倉敷市では、「観光」を振興という側面だけでなく、持続可能な観光地域づくりの柱として位置づけ、市内を5つのエリアに分け、それぞれの歴史や産業、観光資源の違いに応じて課題解決の方向を明確に打ち出している。例えば、多くの観光客が訪れる美観地区では、ゲートウェイ機能の強化とオーバーツーリズムの未然防止の両立を図るほか、ジーンズストリートで知られる児島地区では、市内周遊の戦略拠点として二次交通の充実を掲げている。また、水島地区では、工業夜景や産業資源を活かした教育・産業観光に加え、ビジネスと観光を組み合わせたプレジャー需要の開拓を目指している。

中でも児島地区の再生においては、地域産業の再興を目指す事業者を支援、その取組を広げていく施策の重要性を再認識した。長年、縫製や繊維産業で発展してきた地域でありながら、時代の変化とともに衰退し、商店街は一時期シャッター街となっていたが、地域の事業者が「ジーンズ」に着目し取組を進めた結果、当初は3店舗から始まった取組が、現在では52店舗にまで広がったという。今では海外からバイヤーや技術を学びたい若者が訪れるまでになり、多くの来訪者を集める観光拠点の1つとなっている。

3つの日本遺産ストーリーを持つ観光資源に恵まれた倉敷市であるが、モノ消費からコト消費・トキ消費へと観光ニーズが変化する中、各種指標やアンケートを基に現状を分析し、将来を見据えた戦略を描いている点が印象的であった。担当された職員の方の説明からは、地元への深い愛着と使命感が感じられ、大変有意義な視察となった。

●市川克宏委員

倉敷市は、全国初となる3つの日本遺産が認定された都市であり「日本遺産のまち」としての風格を感じた。「倉敷市の日本遺産に認定された歴史を誇りに思いますか」との市民アンケートの間に「そう思う、どちらかというと思う」合わせて9割を超えることから、事業効果とともに市民の地域に対する愛着度の向上を感じるものである。特に児島地域における産業と観光を結びつけた集客戦略は圧巻だった。日本遺産における地域の魅力を副読本や読本「学習まんが」の制作と活用、市職員による出前講座、また体験イベントとして「デニムストラップ、コースター作り」やワークショップなど楽しく歴史や

産業を学ぶ効果を学ばせていただいた。これらの取組が地域住民や民間事業者へより積極的な参画やまちの活性化につながっているものと感じた。

持続可能な観光地域づくりに向け、「地域住民の観光受容度」を新たな指標として位置づけるとの報告があった。また、日本遺産の魅力を自発的・対外的に発信する「地域で活躍する担い手の育成」に取り組む課題意識は同感する。

このことが土台にあってこそ日本遺産を活用した経済的な自立自走の力になると考えるからである。日本遺産に指定されても市民理解と受容なくして日本遺産の目的は達成、発展はできないだろう。本視察においてシビックプライドの醸成という視点で本市に何ができるのか、またどういう取組が可能なのか、今後研究していきたいと思った。

●小林秀司委員

倉敷市「美観地区」は主要駅徒歩圏にある、非常に強みのある観光資源であった。これを基軸にした観光政策を推進し、駅周辺の整備へとつなげている様子であった。市街地に所在し「立地の良さ」を強みとし、地内の住民や周辺の住民とのバランスを意識し展開するなど配慮も見られた。回遊性の向上により滞在期間の延伸を目指し経済効果を高めることを目指し、達成していた姿は本市の施策にも参考すべき点であると感じた。一方で、移動手段の確保と訪問すべきコンテンツ充実、ここに注力すべきと感じた。

児島ジーンズストリートは「まちづかい」の観点からも素晴らしい取組であった。立ち上げから今日まで現在の姿までの拡大継続は学ぶべきものがある。本市においても日本遺産構成文化財の中で、販路拡大や強力な特産物となるようなコンテンツを見出すことも手法の一つとなり得ると感じた。

●星野直美委員

倉敷市の取組から学べる点は、文化資源を「都市の物語」とし、産業振興やブランド形成へ結びつけている姿勢である。倉敷市は「観光は平和のパスポート」という理念を掲げ、観光を世界との相互理解を深める手段として再定義しており、文化を通じた交流価値を明確に示している。また、3つの日本遺産を町並み、近代産業、瀬戸内交流という異なる物語として提示しつつ、現在の暮らしと連続した“生きた文化遺産”として統合している点は、都市ブランドの核を形成する上で大きな示唆となった。近年はホテル建設が進み駅前の景観も変化しているが、観光需要の高まりがまちの発展を後押しする一方で、歴史を維持しながら街づくりを進める重要性も強く感じた。美観地区では、昔から変わらない町並みの中に多くの外国人観光客が訪れ、倉敷の文化的価値が国際的にも評価されていることを実感した。

さらに、児島ジーンズストリートでは、学生服の生産で栄えた地域が産業構造の変化を受けてジーンズへ転換し、独自の洗い加工や縫製技術を磨き上げてきた歴史が“産業の再編集”として示されていた。高付加価値のものづくりは国内外のファンを惹きつけ、インバウンド需要にもつながっている。地域の技術に物語を添えて発信することで、ニッチでも確かな市場を生み出している点は大きな学びである。

倉敷と児島の実践は、文化や産業を過去の遺産としてではなく、未来をつくる資源として再出発する姿勢にこそ価値があり、八王子においても日本遺産「桑都物語」を現代的な視点で再構築し、地域ブランドの形成につなげていく必要性を感じた。

●吉本孝良委員

観光ニーズの変化を踏まえて考察するに、これまでの倉敷市の観光施策は、旅の動機、目的、地域との関係性、旅のスタイルの考え方が、名所旧跡に頼るといった画一的な内容であった。観光目的の場所に囲い込んで、その街並みに感動や満足を促すという、良いところ取りをメインで行う観光施策であったが、その考え方を現代の観光ニーズに当てはめ見直した結果、観光者個人の価値観や志向が反映されたテーマ性の高い目的型旅行へとシフトしており、地域の実情に合わせて成熟した観光地と発展途上の観光地を合わせた施策へとシフトする取組姿勢に、地域の熱量が感じられた。倉敷の美観地区においては、その地区が街のテーマパークを目指した街づくりとなっていた点は本市の今後の街づくりに活かせるのではと感じた。

児島ジーンズストリートでは、これまでの歴史とジーンズを取り巻く産業形態について学んだ。児島ジーンズは金額的には高価なジーンズであるが、それは、素材、染め、織り、縫製、仕上げ、加工とパーツ事に分業されており、高い技術を駆使した高品質なジーンズであるからであり、このことが知られるにつれ、国産ジーンズの聖地と呼ばれるようになり、観光客が訪れるようになっている。産業と観光を結ぶ考え方により、地域と連携をする事によって、当初シャッター商店街に3店舗から始めた施策が、現在は52店舗へと広がり着実に成果を増やしていた。視察当日は定休日の店が多かったため、人通りは少なかったが、土日などは道路に人が溢れる人混みとなるとの説明を受けた。海外からの観光客も多くインバウンドの需要も伸びている。本市も繊維の街であることから、このような手法を取り入れる研究も必要であると感じた。

●中島正寿委員

倉敷市では、令和8年3月に「観光ビジョン」策定。観光を根本から“再定義”し、観光振興の枠を超える、持続可能な観光地域づくりを目指そうとの意気込みを感じた。消費の態様はモノからコトへ、さらにトキへと変化している。(日本遺産の)構成文化財を再構成するだけでなく、価値を生んでいく「観光DX」へ向けた新たな取組であるとも捉えられた。倉敷市では有名な美観地区を有しており、これと併せて水島コンビナートなどと“夜景資源”として活かしていく夜型観光の取組を伺った。八王子市ではまだ着手していない分野である。今後のこうした新たな取組をマネジメントし、展開する「観光地域づくり法人・DMO」が司令塔としてどのような活躍をされるか、期待したい。

また、2日目は、観光地域づくりで重視される“児島ジーンズストリート”を現場視察させていただいたことは非常に有意義であった。日本初の国産ジーンズ“ビッグジョン”誕生の経緯、歴史ある重厚な建築物が品格を保ちながらストリートに並ぶ中、若者も出店できる環境づくりにも尽力されながら「観光

地型商店街」の構築へ向けてチャレンジされていた。八王子市も“桑都”といわれ、織物業が隆盛した時代を経ている。本市も、都内唯一の日本遺産を持つ自治体として、ブランディングを再構築して若者も引きつけられる戦略的取組を考える必要についても感じた。

視察の様子



視察日及び視察先	5月13日（水）広島県尾道市
視 察 内 容	歴史・文化資源を生かした地域ブランドづくりについて
概 要	尾道市は坂の町として知られており、独特の街並みや、数多くの寺社、近代建築群、さらには瀬戸内の多島美が織りなす景観は、日本遺産「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」として高く評価されている。こうした歴史・文化資源を生かし、観光振興だけではなく、地域ブランドの確立や移住の促進、産業振興へとつなげる多様な取組を進めている。同市が有する3つの日本遺産を核として地域の魅力を再編集し、官民連携によるブランド戦略を展開している点や、文化資源の保存と活用を両立させながら、地域経済の活性化へ結びつける手法について学び、所管事務調査の参考とするため、視察を実施した。
委員長所感 (意見・課題・本市への反映など)	●石井宏和委員長 尾道水道に面し風光明媚な尾道は、実際に石段や坂道を歩いて古刹など巡ると風景も変化に富んで味わい深く、日本遺産の「箱庭的都市」の魅力の一端を実感できた。建造物の修景整備などの補助も広く行っているとのこと、ゲストハウスに改修したみはらし亭など絶景で情趣に富んでいた。市役所もライトアップするなど夜景も見事で、市長を含めた日替わりのガイドによるナイトツアーを夏場の3か月間毎日実施し好評だったそうで、こうした夜の観光の強化をすべきだとも思った。この10年間で71回の公開講座や町歩きなど行ったという文化遺産パートナーシップ講座の登録者はこれまでに286名、そのうち15回出席した方53名には文化遺産パートナー認定証を交付していて、それぞれ観光ガイドやさまざまな分野の調査などで活躍されているとのこと、貴重で見習いたいものだと思った。奉行所や本陣などもあった西国街道、村上海賊の拠点でもあった島々を結ぶしまなみ海道に加え、山陰に抜けるやまなみ街道など道の押し出しに努めていることも重要で、サイクリング客数は年間20万人以上と推計されているそうで、実際にその姿も目立った。この点も学びたい。日本遺産のマークのあるパンフレットの種類が多数あり、宣教師が見た西国の海賊の比較分析や、16の主な城跡を写真や立体地図付きで解説したものなど特に見応えがあった。各時代の城跡が残る本市でも、こうした解説や地図などが豊富なテーマ別のパンフレットなどつくることも大切だと思った。林芙美子など文学や映画との関りが深い尾道は、そうした資料館や石碑なども多く、町歩きのポイントにもなっている。本市でもこうした魅力を増やしたい。
委員所感 (意見・課題・本市への反映など)	●古里幸太郎副委員長 3つの日本遺産の背景に、2市3町合併による各文化の存在があると感じ、山と海の文化、どこか懐かしいまちが尾道市の特色との説明がしっくりきた。市内に入り、移動中、電車の車窓から飛び込む景色はまさにその通りであった。また、千光寺とロープウェイを高尾山とケーブルカーの景色に重ねたが、羨ましく思ったのは、主要駅の尾道駅から徒歩10分程度で重要文化財を見に行けることであった。箱庭的都市の魅力を体感した思いであった。404の指定文化

財を活かしたまちづくりは、歴史、文化財好きにはそれだけで十分魅力を感じると思うが、山と海が近いというロケーションも拍車をかけていると感じた。寺巡りやしまなみ海道のサイクリングなどでは、多言語ガイドにも注力し、国内外の観光客を呼び込むための観光戦略の他、文化財の保存活用や人材育成など、独自の取組は学びとなった。夜間の文化財のライトアップ事業も参考にしたい。令和2年度に総括評価を受け認定継続となった際の文化庁の指摘事項として、①見える化 ②更なる民間の巻き込み ③自立自走の仕組み があったことを説明していただき、本市にとっても必要となるポイントであると捉えた。尾道駅を出てすぐに寺巡りなどを楽しめる一方で、並行して位置する商店街については、たまたま休業日のお店が多かったのかもしれないが、夜はシャッター街化しているようにも見え、観光客を滞留させる施策整備の必要性を感じた。観光と地域振興を結びつける施策の参考にしたい。

●高橋剛委員

尾道市の視察から本市が学ぶべきは、豊かな歴史・文化資源を単なる「保存対象」にとどめず、現代のライフスタイルや産業と融合させて「生きた地域ブランド」へ昇華させる手法である。具体的に参考にしたい内容は以下の3点に集約される。

第一に、地形や歴史を一体の物語としたストーリー性の高い情報発信である。日本遺産「箱庭的都市」の魅力を生かした独自のブランディングは、本市の歴史資産発信にも応用可能である。

第二に、民間の活力を巻き込んだ空き家・古民家の再生と活用である。歴史的建造物を宿や起業空間として再生し、若者やクリエイターの移住・創業を促す仕組みは、文教経済の好循環を生む先進モデルと言える。

第三に、サイクリングや映画、アートなど、異分野のコンテンツを掛け合わせた多角的な魅力づくりである。

高尾山や絹の道、伝統文化などの資源を持つ八王子市においても、これらを点から面へと繋ぎ、若者の教育や新たな産業振興へ有機的に結びつけることで、持続可能で訴求力の高い地域ブランドを構築していくことが重要と感じた。

●九鬼ともみ委員

尾道市では、日本遺産認定以前から、街並みの保存活用を通じた歴史文化を生かしたまちづくりを推進してきた。いまは、令和13年度まで10カ年計画「尾道市歴史的風致維持向上計画」に基づき、文化財の保存活用、都市整備、景観形成、観光振興など連携して進められている。日本遺産の担当を、構成文化財を熟知した文化振興課の学芸員が担っていると聞き、深く納得した。複数の日本遺産を継続的に運営していくには、観光施策として扱うだけでなく、その土台となる歴史や文化財への深い理解が欠かせないのだと感じた。

令和2年度の文化庁による総括評価では自立した運営の仕組みづくりや市民参画の具体化、民間事業者による新たな企画づくりの環境整備などの課題が示されたという。それを受け、尾道観光協会などと連携し、ナイトツアーやク

ルーズなどの日本遺産特別ツアーなどを実施しているほか、民間と連携した新たな取組も進めている。また、村上海賊に関する冊子の充実など、尾道の歴史や文化財の周知にも力を入れていた。さらに、文化遺産パートナー養成講座を継続的に実施し、市民が観光ガイドや文化財調査の担い手として関わる仕組みを作っている点も、本市にとって大変参考になると感じた。

その後、実際に尾道駅周辺を歩いてみると、寺社などの文化財、古い町並み、そして尾道水道が一体となった景観は独特で、「箱庭」という言葉にこのまちの魅力が凝縮されているように思った。一方、夕方を過ぎると多くの店舗が閉まってしまうということで、観光客がゆっくり滞在し、食事や買い物を楽しめる環境づくりも重要であると感じた。

●市川克宏委員

日本遺産は、世界遺産や重要文化財のように「文化財そのもの」を指定するものではなく、点在する文化財を“面”として活用する地域振興策であり、地域活性化や観光振興を促し、シビックプライドを醸成していくことにあと思う。本市の日本遺産である、高尾山への祈りを中心に絹産業と城下町文化が発展した歴史を桑都物語として構成する文化財を理解し、市民的認知度を向上させるには、創意工夫と市民と市内事業者との連携とが必要だと感じている。尾道市では、日本遺産のストーリーを構成する文化財を熟知している文化振興課の学芸員が継続して担当していることが複数の日本遺産を管理・運用できる強みとなっていることに強い印象をうけた。文化庁から「市民や民間事業者が自発的に日本遺産の取り組みに参画しやすい環境づくりに取り組むこと」を問題提起されているとのことだった。この提起に対し日本遺産構成文化財を活用した民間連携によるコンテンツの造成や、新たな地域資源を地域住民とともに調査研究を進めていく取組は、日本遺産に指定されたまち全体が日本遺産の物語を理解し、まちの魅力を再確認し、まちの活性化につながる日本遺産の核心に迫るものであることを学ばせていただいた。

本市は日本遺産のストーリー桑都物語を理解促進していく要に日本遺産推進課を配置している。主担当に学芸員など専門的な知見を有する職員を継続して配置していくことによって、産業振興や観光、市民活動推進、学校教育部などとの横の連携を生み出し、認知度を促進していくポイントになるのではないかと感じた。

●小林秀司委員

尾道市には3つ日本遺産が存在する。「箱庭的文化都市」は自治体単独の日本遺産で、尾道水道と特徴ある地形の街とそこに所在する文化財を冠したものであった。瀬戸内海・水道・地形自体が価値を生み出しており、そこに付随して構成文化財を磨き上げ価値を高めていた。本市においても、従前より高い知名度の「高尾山」というキラーコンテンツを活かし、その他と言っては失礼になるがその他の文化財を磨き上げてきた。高い知名度を活かし、文化財を磨き上げそれらの価値を高める、かつ回遊性を高めて経済効果へと繋げる。「海」と「山」の違いはあるが大いに参考となる取組であった。かつ他の2つの日本

遺産に関しても「村上水軍」「北前船」と海洋によるつながりに起因している為、適宜な協働ができていると感じた。

●星野直美委員

尾道市は日本遺産ガイドの育成に力を入れ、毎日テーマを変えたガイドツアーを実施している。特別有料ツアーも展開し、文化資源を「学び」「体験」「経済価値」へと転換する意欲が伝わってきた。地元住民がガイドとして関わることで、日本遺産の周知が進むだけでなく、知れば知るほど地域への愛着が深まるという好循環が生まれるのではないかと。さらに、外国人観光客の増加を見据え、外資系ホテル「LOG（スタジオ・ムンバイ）」を誘致するなど、インバウンド戦略も着実に進めている。公共交通の本数は多くないものの、街中の回遊性を高めるために小型モビリティ（いわばトゥクトゥクのような乗り物）を導入し、坂と路地が織りなす独特の地形を逆に魅力として活かしている点も興味深かった。海から見上げる山肌には構成文化財が点在し、歴史的建造物を守りながら個性的で風格のある街並みを創出しようとする姿勢が感じられた。

また、映画『転校生』の舞台となった階段やロープウェイなど、物語性のあるロケーションが多く、地元で生活する人たちには当たり前の風景であっても、外からの視点によって再発見される価値がまだ多く眠っていると感じた。例えば、村上水軍や毛利元就ゆかりの歴史も含め、歴史ファンに向けたPRなど、コンテンツの活用余地はさらに広がるだろう。地域の人気が気づかない魅力を、外からの視点が掘り起こす——その積み重ねこそが都市ブランドを形づくるのだと実感した。

尾道の取組は、文化を“展示”するのではなく“生きた都市資源”として育てる姿勢にこそ価値がある。八王子も日本遺産を軸に、文化・産業・観光を結びつけた都市ブランドづくりを進める上で、大きな学びとなる視察だった。

●吉本孝良委員

尾道市は3つの日本遺産「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」「芸予諸島一よみがえる村上海賊の記憶」「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」に係わる自治体であり、それぞれの日本遺産をけん引している。この3つの日本遺産を軸に市内各地の魅力向上に努めており、それが全市に広がり市民に対しても日本遺産の取組が周知されている。市民と行政が協働しながら歴史と文化を活かしたまちづくりを推進している。日本遺産「箱庭的都市」は令和2年に文化庁による総括評価を受け、民間事業者が自発的にコンテンツを造成していく環境づくりや、計画の見える化具体化について等問題提起をいただいたとのことであった。今後本市においても様々な問題提起をいただくと思うが、本市の場合は現状の課題として市民への日本遺産の取組周知を行っていただかなければならないと感じた。

●中島正寿委員

尾道市は、市全体が風光明媚で、地域ブランドの“塊”のようなまちである。（日本遺産である）箱庭的都市、村上海賊、北前船の3つを軸として、これら

を活かして「日本遺産のまち 尾道市」のブランド力を高めようとされる取組について伺うことができた。尾道市の歴史的風致に富んだまちなみに目を惹かれる一方、2015 年3月に全線開通した“中国やまなみ街道”など近年までに交通の結節点としての機能が集約し、「瀬戸内の十字路」として発展していくポテンシャルも備えられたと感じた。もっともこうした歴史あるまちづくりの維持にあたっては、「文化財保存活用計画」や「歴史的風致維持向上計画」のもとで堅実に取り組まれていることは伺ったが、今後急増してきたインバウンドに(ガイドのほか)十分に対応できる体制、また人材の養成などに苦慮されているのではないかと推測するところである。“尾道”を映画・尾道三部作で全国区にされ、メガホンをとられた、故・大林宣彦監督ならどのように展望されただろうか、と思いを馳せた次第である。

視察の様子



視察日及び視察先	5月14日（木）滋賀県草津市
視 察 内 容	スクールE S Dくさつプロジェクトについて
概 要	草津市は、東海道と中山道の分岐点の宿場町として栄えた歴史を有し、人と文化が交わることで独自の地域性を育んできた都市として、市民の郷土愛を高める教育・文化施策を積極的に推進している。また、日本遺産「琵琶湖とその水辺景観－祈りと暮らしの水遺産」の構成文化財も有している。 視察対象とした「スクールE S Dくさつプロジェクト」は、地域の歴史・文化・環境を学習資源として活用し、児童生徒が持続可能な社会の担い手として成長することを目指す先進的な取組である。学校・地域・行政が一体となり、探究的な学習を通じて地域課題の理解や主体的な行動力を育成する仕組みや、シビックプライド醸成に向けた教育の在り方について学び、今後の所管事務調査の提言に向けた参考とするため、視察を実施した。 ※ESD (Education for Sustainable Development) …持続可能な開発のための教育。SDGsの実現に向けた取組であり、様々な地域課題に対して、体験的な学びを行うことで子どもたちが問題解決に主体的に関わり、地域社会の一員としての意識と行動力を身につけることを目指す学習・教育活動。
委員長所感 (意見・課題・本市への反映など)	●石井宏和委員長 東海道と中山道の分岐点になる宿場町として賑わった草津市は、現存する最大規模の本陣跡や高札場や道標など、往時を偲べる文化財がまとまってあり、一般公開されている本陣では、板張りの風呂や馬つなぎの木など興味深く見た。本市も、甲州街道と小仏の関や峠、城跡など、全国的に見ても貴重な史跡をもっとアピールすべきであり、魅力的なデスティネーションとして、観光の目的地に選んでもらう努力が必要だと痛感した。 草津市の持続可能な開発のための教育(E S D)は、以前から続けられてきた田んぼや里山など多様なフィールドでの体験学習など行う地域協働合校事業や、こども環境会議の成果を活かしながら、全小中学校で行われ、年に1回各校の実践を交流するE S Dフェスタも開催している。探求するテーマも子どもたちが話し合って決め、1年かけて調べ、まとめ、提案し、行動し発信することで、自己肯定感が低い印象だった子どもたちが成長する様子がよく見え、校庭を畑にして特産の春大根を育てて売ったり、特産のアオバナのおみやげをつくったりした取組について、特にいきいきとした説明を受け、感心した。アオバナ入りのお茶はすっきりと美味しく、今後さらに人気のお土産ができる予感もした。 総合的な学習の時間を使って、歴史や文化を含めた地域の資源を学び、近隣の住民と一緒に地域振興につなげる取組を進めることは大変有意義で、本市でもぜひ進めてほしいし、全校での取組を交流することも大切だと思った。本市の歴史的な文化財は市内全域にあり、身近な文化財と歴史の探究を学校ごと地域ごとで行うことで、地域の愛着を増し、歴史意識を深めることになると思う。全市的な郷土文化の探求の機運をつくりたいと思った。

委員所感
(意見・課題・本市
への反映など)

●古里幸太郎副委員長

率直に、人とまちが良いというのが草津市の第一印象であった。今回の視察目的である「スクールESDくさつプロジェクト」が学校教育で浸透していることもその要因のひとつでないかと感じた。生成AIをはじめ加速度をあげて進むデジタル社会の中、子どもたち自身に、地域課題など問題点をしっかりと考えさせ、結論がでるまで行動させる取組が、人材育成、シビックプライドの醸成に繋がっていることがよくわかった。

また、それを支え進める大人も立派な方が多いと感じた。教育事業としても大変重要な取組であるが、所管事務調査の提言に向けて、テーマの出口戦略として継続ならしめる持続可能な取組を考える上で、スクールESDが草津市の歴史・文化や日本遺産の浸透にどのように活かされているか実施例を伺った。

一例として、絶滅危惧種を扱った教材で琵琶湖にも対象種がいることを知り、ESDとして種を残すための取組を考案した取組の他、中学生がインドネシアとオンラインで湖を守るためのやり取りを英語で行った取組を教えていただいた。シビックプライド醸成にも繋がり、語学力向上とともに地域のことを語れる力を身に付けられる素晴らしい実践であると感銘を受けた。子どもたちが大人になった時に、市外に転出したとしても、そこで琵琶湖のことを語れるかどうか、子どもたちのアイデンティティがどこにあるのか、それがESDの真髄であるとの説明に共感した。

歴史や文化、日本遺産というまちの資産を活かした地域振興といっても経済的なことだけでなく、八王子という町の存在、魅力が、人から人へと伝播し、そして、世界へと広がっていくことが、ひいては地域振興に繋がっていくという視点が持てた。持続可能な事業や取組を目指す上でのキーはやはり人であり、その教育施策の重要性を確信した。

●高橋剛委員

草津市の取組から、八王子市の教育や地域振興において参考にしたい内容を以下の4点にまとめた。

①行動と発信まで導く「学びのサイクル」：草津市の「スクールESD」では、地域資源について「知る・調べる」に留まらず、子どもたちが自ら「提案する・行動・発信する」段階まで実践している。例えば、市の花である「アオバナ」の絶滅危機を知った小学生が、自ら「アオバナのしおり」や「アオバナの砂」といったお土産を考案してPR活動を行った事例は、主体性と自己有用感を大きく高める仕組みとして大変参考になる。

②地域課題と学校課題の同時解決：中学校の「ベジクサ（地元農産物）」プロジェクトでは、地域の魅力発信不足という課題と、生徒の自己肯定感の低さという課題を掛け合わせた。地域住民と協働で畑を開墾し、大根を育てて販売することで、地域と学校の課題を同時に解決へと導いている。

③シビックプライドの醸成と教科横断の学び：琵琶湖の環境保全を英語の授業で扱い、海外の学生と交流するといった教科横断的な学びが実践されている。将来、子どもたちが「高尾山」をはじめとする地元の魅力を自分の言葉で語れるようにする教育方針は、八王子市の日本遺産推進におけるソフト施策と

しても強く共感できる内容である。

④歴史遺産の体験型活用：歴史施設である「草津宿本陣」において、マインクラフトを用いた空間づくりや「子ども本陣博士」の育成など、子どもが歴史に主体的に親しむ工夫が行われており、文化財の新たな活用法として有益と感じた。

●九鬼ともみ委員

草津市の「スクールE S Dくさつプロジェクト」では、SDGs の目標のひとつである、“質の高い教育をみんなに”を考え方の中心に置き、子どもたちが地域課題に主体的に関わり、多様な人々と協働しながら、解決策を考え行動できる「持続可能な社会の創り手」を育てることを目的としている。学びのサイクルを「調べてまとめる」で終わらせず、「提案・行動・発信」までつなげ、地域社会の一員としての意識と行動力を身につけることを目指している。

その実践として、中学校での「ベジクサPRプロジェクト」、小学校での「アオバナPR大作戦」が紹介され、その中では子どもたち自身が行政へ要望を届け、実際に地域課題の解決につながったという話があった。一方で、実現しなかった要望もあり、その悔しさも含めて「失敗から学ぶ」ことを教育の一部として位置づけていることに共感した。いまは失敗を避けがちな時代だが、思い通りにならない経験の中でこそ、他者と協働する力や課題を乗り越える力が育つという考えを伺った。

このように、子どもたちを受け身の学習者ではなく社会の一員として育て、「先生は教える人というより、コーディネーターやファシリテーターであるべきだ」という姿勢で指導に当たっていることに大いに感銘を受けた。「スクールE S Dくさつプロジェクト」は教育委員会だけでなく、大学、事業者、生涯学習部門、地域住民まで巻き込んだ“地域ぐるみの教育”となっており、本市においても、地域資源を生かしながら、子どもたちが主体的に地域とかかわる学びにつなげていけるのではないかと感じた。

●市川克宏委員

視察対象とした「スクールE S Dくさつプロジェクト」は、地域の歴史・文化・環境を学習資源として活用し、児童生徒が持続可能な社会の担い手として成長することを目指し「地域が人を育て、人が地域を育てる」学校を起点とした地域連携と学びの循環である。特に注目したのは、学校教育と社会教育の連携・協力の視点である。持続可能な社会の形成には、子どもから大人まで継続した社会の担い手づくりとして学び成長していくことが要であると感じたからである。

草津市は「琵琶湖とその水辺景観 ― 祈りと暮らしの水遺産」への構成文化財として、芦浦観音寺、草津のサンヤレ踊りが登録されている。日本遺産の認知度向上とともに、日本遺産の目的との1つである地域活性化・観光振興を促進していくうえで、地域で学び暮らす住民の持続可能な「学校を起点とした地域連携と学びの循環」は、本市の日本遺産におけるシビックプライドの醸成（八王子の関係人口を増やし、市民が誇りを持ち、地域活動を広げる）の方法を探

るうえで重要な示唆を与えてくれたと感じている。

本市・市立学校では、義務教育9年間を通して、「主体的に社会に参画する力」の育成や「自立」を促す教育の実現に向け、全校でキャリア教育に力を入れている。市教委は今後、子どもたちがキャリア教育を通して得た知識や経験をもとに、新たな価値を創造し、社会の創り手となる人材として必要な資質・能力の育成が不可欠であることを課題としている。本市の日本遺産の強みを「地域が人を育て、人が地域を育てる」学校を起点とした地域連携と学びの循環に活かさないだろうか、そんな問題意識を持って考えてみたいと思う。

●小林秀司委員

日本遺産は、地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定し、地域に点在する遺産を面として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている。視察先の草津市では、平成30年5月24日に、「芦浦観音寺」と「草津のサンヤレ踊り」が日本遺産「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」に構成文化財として追加認定されている。日本遺産の研究、という概念では、今視察先の「草津市」では教育側から、シビックプライドの醸成による日本遺産の普及啓発と将来的な発展へと繋がるものと感じた。ただ本題の日本遺産への言及が少なかった。

●星野直美委員

滋賀県草津市のスクールE S Dの取組では、地域の農業や特産である「あおばな」を活用したプロジェクト、多様な人々との協働など、持続可能な社会の創り手を育てる実践が進められていた。特に、教員の方が「地域にとどまらず、世界で通じる子どもを育てたい」と語っていたことが印象的だった。

草津といえば温泉を連想するが、滋賀の草津には温泉がない。それを逆手に取った「おんせんなし饅頭」というユーモアのある土産物があり、地域のアイデンティティを軽やかに発信する工夫が感じられた。岐阜の「下剋上アユ」などもそうだが、こうした“地域をPRするとんち”は、地域ブランドづくりにおいて小さくても大切な取り組みだと改めて思った。私自身も八王子城の落城の歴史を和菓子に込めた「もはやこれまで」を提案したことがあるが、こうした遊び心は地域の魅力を伝える上で重要な視点だと感じている。

一方で、スクールE S Dの取組は、熱意ある教員の存在が大きな推進力となっているが、継続性という課題も見えたと感じている。上級生の活動をそのまま繰り返すだけでは続かず、毎年新しい工夫やアイデアが求められるのではない。だからこそ、地域の素材を使いながらも、子どもたち自身が世界へ視野を広げ、新しい価値を創り出していく力を育てることが重要だと感じた。

八王子では「はちおうじっこ」という地域密着のキーワードを掲げているが、地域を大切にすることと、世界へ視野を広げることは両立できる。むしろ、地域の文化や歴史を理解した上で、それを世界に向けて発信できる子どもを育てることこそ、これからの教育に求められる姿ではないか。草津の取組は、その方向性を示してくれる視察だった。

●吉本孝良委員

草津市のE S Dのプロジェクト支援については、今の教育現場に必要な事柄がたくさん含まれていると感じた。私が小学生の頃、昭和 50 年頃は物が無い時代であり、また、子どもも1クラスに40名以上いる時代であった。当時は遊びもコミュニティも子ども達の中でルールを決めていた時代で、ある意味「子ども」らしい時代だったともいえる。

これに対し現在は、失敗を恐れてしまうがゆえに、新たな挑戦になかなか踏み出せない時代となっているのではないかと感じる。草津市での学びのサイクルにおける主体性、探究性、協働性、社会性の育成には共感する点が多く、今後の教育現場における、先生（教育者）の位置づけにも納得する内容であった。次世代の子どもたちが育成するにあたって必要な考え方であると感じた。

●中島正寿委員

E S Dとは“「持続可能な社会の創り手」を育てる教育 ”のことであるという。草津市では、情報化やグローバル化の進展により、子どもたちが将来の予測が見通せない厳しい時代環境の中で答えのない課題に対応していく力を求められているとの認識のもと、大変興味深いチャレンジングな教育を展開されている、と感じた。いわゆる「スクールE S Dくさつプロジェクト」においては、学びのサイクル、多様な人々と協働する、地域課題解決のため行動する、という3つの観点、プロセスを構築。具体的にこれを実践した松原中学校、笠縫東小学校の好事例を通して、子ども自身が主体的に地域社会の課題を発見し、積極的に関わってどのように行動していくのか、という可能性を示された。それは、子どもたちだけでなく、学校・教員においても社会に開かれた教育課程の実現、地域・保護者においても地域の良さを再発見し新たなコミュニティの醸成を図る契機となっているようである。

本市に当てはめれば、こうした教育実践のプログラムの中に、シビックプライド醸成の一環として、例えば“子どもたちからみた日本遺産”など、子どもが親しく関わり考え、大人が考えなかった視点でアプローチする機会を与えることができるのではないだろうか、と考えた次第である。

視察の様子

